

第78回 (R6. 6)

花の命は・・・

春が来ると色とりどりの花たちが、ホームセンターや園芸店に並びます。古来、花は「美しいもの」「華やかなもの」あるいは「気高きもの」などにたとえられてきました。「**立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は百合の花**」などは、今日ではセクハラの誹りを受けるかもしれないませんが、美しい女性を花にたとえた名言です。

ところで、林芙美子が好んで色紙に書いた「**花の命は短くて 苦しきことのみ多かりき**」という有名な詩があります。確かに桜をはじめ、多くの花の命は短く儚いものです。しかし一方で長い間咲き続ける花もあるのです。春先に植えるサルビアは秋まで楽しめ、特に赤いサルビアは秋の深まりとともに、一段と鮮やかになります。また、秋に植えるパンジーやビオラも、五月の連休まで次々と花を咲かせま

す。大作家先生には申し訳ないのですが「**花の命は短いようで結構長い**」とも言えそうです。

一方こんな諺もあります。

「**年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず**」。花は毎年変わらず咲くけれど、人の境遇は年々変化していくという意味だそうです。花は散っても翌年また咲きます。むしろ人の運命の方が、はるかに儚いというわけです。ここでは花は「生命力に溢れたもの」として描かれています。花の命を巡っては、実に様々な見方があるものですね。

この時期ホームセンターを訪ねると、売れ残って枯れそうになったポット苗が、ひっそりと片隅に集められ、無残な姿を晒しています。売れ残った苗はスーパールの食品のように、早めに値下げして売れば、いくつかの命は救えたはずと思うのですが・・・